

岩手・柳之御所遺跡 やなぎのごしょ

- 1 所在地 岩手県西磐井郡平泉町字柳御所
- 2 調査期間 第五二次調査 二〇〇〇年(平12)五月～一〇月
- 3 発掘機関 岩手県教育委員会
- 4 調査担当者 斎藤邦雄・佐々木務・羽柴直人
- 5 遺跡の種類 居館跡
- 6 遺跡の年代 平安時代(一二世紀後半)
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(一 関)

柳之御所遺跡は、JR平泉駅の北方約六〇〇m、平泉市街地の東端の平泉町柳御所から伽羅楽にかけて所在する。北上川によって形成された標高二五m前後の低位段丘縁に立地し、その面積は約一一万㎡である。

一九八八年から実施された緊急発掘調査で、遺跡を囲む大規模な堀、園池・堀・掘立柱建物・井戸などが検出され、『吾妻鏡』に記載された奥州藤原氏三代秀

衡の平泉館であると推定されている。九七年度に国の史跡指定を受け、九八年度から当教育委員会が史跡整備に向けた資料収集を目的として調査を継続している。

本年度は既往の調査で検出されていた園池跡の北側及び北西側の地域を中心として、約二五〇〇㎡の発掘調査を実施した。その結果、一二世紀の掘立柱建物六棟・柱列二条・井戸五基・土坑類二一基(トイレ跡と推定されるもの一〇基を含む)・竪穴状遺構一基・溝跡八条(道路の側溝二条を含む)・堀跡二条を検出した。

今回の調査で検出した注目すべき遺構として、園池の北側約五〇mの場所に位置する一一度の傾きを持つ大型建物がある。既往の調査で検出されていた正方位の軸線を持つ建物群とは異なる中心域が発見され、柳之御所遺跡内には時期・場所を異にする中心域が複数存在することが確認された。遺構などの関係から、一一度の軸線グループが新しく位置づけられ、これは園池の造り替えとも呼応している可能性が十分に考えられる。井戸の一基から一二世紀第I四半期頃と推定される、ロクロかわらけのみによって構成される良好な一括資料が得られ、隆盛期は一二世紀後半であることは確実であるが、遺跡の開始年代が第I四半期までさかのぼることが確認された。

今回紹介する木簡は、一二世紀後半の井戸五二SE八の最下層の埋土から出土したものである。この井戸は、開口部の径約二m深さ

約四mを測り、多数の完形かわらけをはじめ、扇・箸・木槌・折敷・建築部材・焼けた土壁などが出土している。当該資料と同じ層から出土した辺材部を残す折敷を年輪年代測定した結果、一一八六年伐採の鑑定結果が得られており、かわらけ・木製品などの遺物は、柳之御所遺跡の終焉を飾った遺物群と考えられる。

8 木簡の釈文・内容

(1) 〇七 人
〇廿二 人」(刻書)

・ 〇〇八一 人」(刻書) (122)×27×3 019

(2) 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇
コクス ■ ハカリソヨ (103)×19×2 065

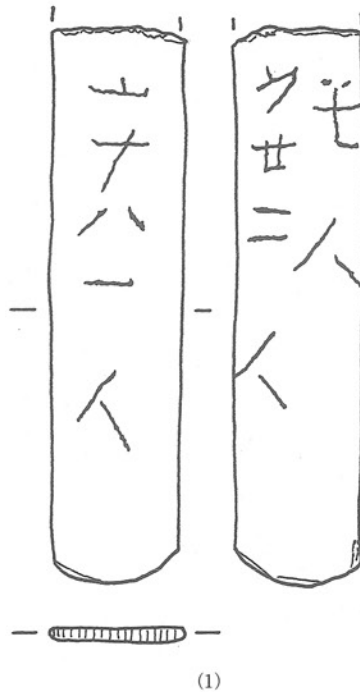
(1)は、短冊型の薄い木簡で上半部は欠損しており、下端部は曲線状に整形されている。文字は両面に見られ、先端の鋭利な金属製品のような工具などによって両面に文字が刻書されている。漢数字及び人の文字が刻まれており、人の員数を記したものと思われる。

(2)は、用途未詳の木製品の片面に墨書の文字が確認される。上半部は明らかに欠損しているが、下端は文字の状況からほぼ現状をとどめていると推定される。二行にわたって仮名文字が記されており、誤記による抹消部分もあり何らかの文章を記したものと考えられる。

9 関係文献

岩手県教育委員会『平泉遺跡群発掘調査報告書 柳之御所遺跡第五二次発掘調査概報』(二〇〇一年)

(斎藤邦雄)



(1)



(2)